

# 大博物館だまの

No.45  
2005.1

## 津山郷土博物館



▲池田利隆宛森忠政書状 縦34.5cm、横49cm(個人蔵)

●一段目

追而三左衛門殿御煩  
弥御本復候由目出度  
存候以上

態令啓候乃

將軍様当月十

五日二駿府へ可被成

御座候由風聞候

依様子尾州那古屋へも

可為御成候様二申候

定而其元へ八槌

成儀相聞可申候

条承度存候尾州へ

御成二御座候者

●二段目

為御見廻貴様可

被成御越候哉具

被仰聞候者可受候

恐惶謹言

羽右近

三月二十一日忠政(花押)

松武蔵様

人々御中

# 池田利隆宛森忠政書状について

## 1 はじめに

森忠政の書状は、知られている数が少なく、忠政自身の意識や行動を知るのは困難な状況となっている。そのため、新資料の発見が望まれるのであるが、幸いなことに、津山城築城400年記念特別展「戦国武将 森忠政—津山城主への道—」の開催に関連して、新たに忠政の書状が数点確認された。ここでは、その中から、池田利隆に宛てた森忠政の書状について考察を加えてみたい。

## 2 書状の内容

まず、その内容は次のようなものである。

「 追而三左衛門殿御煩  
 弥御本復候由目出度  
 存候以上

態令啓候乃  
 將軍様当月十  
 五日二駿府へ可被成  
 御座候由風聞候  
 依様子尾州那古屋へも  
 可為御成候様二申候  
 定而其元へ八槌  
 成儀相聞可申候  
 条承度存候尾州へ  
 御成二御座候者  
 為御見廻貴様可  
 被成御越候哉具  
 被仰聞候者可受候  
 恐惶謹言

羽右近

三月二十一日 忠政(花押)

松武蔵様

人々御中 』

この書状に登場する人物は、將軍以外に3人であ

る。発信者の「羽右近忠政」、受信者の「松武蔵」、そして、追而書きの「三左衛門」である。書状の年代によっては、駿府という言葉の背後に徳川家康の姿が見えよう。

この書状で用いられている「羽右近」は「羽柴右近」の省略で、天正15年(1587)に豊臣秀吉から羽柴姓を拝領して以降、森忠政が通常用いていたものである。相手方の「松武蔵」は「松平武蔵守」で、池田利隆である。

池田利隆は、姫路藩主池田輝政の子で、慶長8年(1603)には、弟忠継の領する備前国の後見人となっている。その後、慶長12年(1607)6月2日に松平の姓を得て武蔵守を称した。慶長18年(1613)、父輝政の跡を受けて姫路藩主となっている(「寛政重修諸家譜」)。そして、追而書きに見える三左衛門は、利隆の父輝政である。

忠政の最初の正室は中川清秀の娘とされ、池田輝政の室も同じく清秀の娘であった。利隆は、忠政にとって甥に当たるわけである。

さて、書状の内容は概ね次のようになる。「將軍が3月15日に駿府へ行くとの風聞があり、その時の様子によっては尾張の名古屋へも行くらしい。そちらには確実な情報が入っているだろうから教えて欲しい。將軍が名古屋へ行くようなら、そちらは挨拶に伺うのだろうか。詳しく教えて下さい。」

## 3 書状の年代

それでは、この書状の年代はいつになるのだろうか。

まず、追而書きの池田三左衛門輝政についてみると、輝政は、慶長17年(1612)の正月頃には病気に罹っており、將軍家からも見舞いの使者が出されている。しかし、その後回復し、同年8月には、駿府を訪れているが、再度悪化して、翌慶長18年(1613)1月25日に没している。少なくとも、この書状はこれ以前のものである。

次に、池田利隆が武蔵守を称したのが、慶長12年(1607)6月2日であり、輝政が没したのが慶長18年(1613)1月25日なので、3月21日という手紙の日付からして、書状の時期は、慶長13年(1608)から慶長17年(1612)の間ということになる。

この期間内で、書状の本文にあるように、将軍が駿府を訪れている事例を挙げると、慶長15年(1610)と、慶長17年(1612)とに2回あるのみである。

第1回の慶長15年2月20日、将軍秀忠は、家康の居る駿府に向かうため江戸を発している。そして同月24日には駿府城へ入った。その後、3月5日には駿府を発って江戸に向かっている。

第2回、慶長17年3月13日、秀忠は、駿府に向かうため江戸を発った。そして、17日に駿府城に入る。その後、4月10日、秀忠は駿府を発っている。

一方、名古屋城は、慶長14年(1609)から計画され、その後諸大名の助役で工事が進み、慶長17年(1612)正月からは、天守や御殿の造営に掛かっている。

このような状況の中で、将軍秀忠が、駿府に居る家康の元を訪れたついでに、天守や本丸御殿の工事が進んでいる名古屋城を訪れると噂されたとしても、不思議ではないだろう。

こうした事例と、手紙文にあるような輝政の病氣、そして病状が一時的に回復していることなどを考え合わせると、この書状の年代は、慶長17年(1612)と考えるのが妥当であろう。

#### 4 忠政の動向

では、この時期の忠政の動きはどうだったのだろうか。

慶長17年(1612)正月25日、忠政は、岡崎付近の狩り場在家康を訪ね、緞子の袴を献上している(『徳川実紀』)。また、6月20日には、忠政は、再度駿府を訪れ、家康に、銀300枚、帷子10領、単物10領を献上している(『徳川実紀』)。

ただ、慶長17年を通じての忠政の動きは、よく分からない。この年には、『森家先代実録』によると、将軍家から、叔父の森可政を森家に引き取っている。

忠政の目指した新体制の要とするためで、この時には、忠政自らが、津山で出迎えたとされているのである。とすれば、忠政は、1月25日には岡崎付近にいて、6月20日には駿府、その他の期間のある時期には津山にいたことになる。

この前年の慶長16年(1611)3月には、諸大名に内裏造営が命じられており、その中に、忠政も輝政・利隆も含まれている。同時に可政も含まれていた。この工事の過程によっては、彼らは一時的には京都にいたことも考えられる。ただ、こうした書状による問い合わせということを見ると、忠政は津山、利隆は岡山か姫路にいたのではあるまいか。

忠政が、利隆から情報を得ようとして書状を書いているのは、単に親戚だからではない。池田家は名門であり、利隆は、榊原康政の娘を将軍秀忠の養女として妻に迎えており、松平姓を許されているなど、将軍家との深い繋がりもあって情報が入りやすいとの、忠政の判断であろう。

#### 5 おわりに

慶長18年(1613)6月24日には、忠政は駿府に呼び出されて、美作から駿府に到着している。そして、26日、駿府城に登城。家康から、肩衝の茶入れを拝領し、岡山藩主池田忠継に国務を教諭するよう命じられ、帰国の暇を与えられている。これは、忠継の後見をしていた利隆が、姫路藩主となったことによるものと考えられる。

このように駿府の家康の元をたびたび訪れる一方で、この書状からは、将軍の動向にも常に注意を払っている様子が知られる。戦国時代を生き抜いた忠政が、近世大名として生き残るためには、家康のみならず、将軍家との関係を重視しなければならず、そのためには将軍の動向に関して、細大漏らさず情報収集をする必要があった。老中や将軍の側近からの情報はもとより、他の大名家からの情報も積極的に得ていたことが分かる貴重な書状である。

(尾島 治)

## ◆津山城築城400年記念特別展を開催しました

本年は1604年森忠政が津山城の築城を開始してから、ちょうど400年の節目にあたります。本市では本年4月1日から来年5月5日まで、春夏秋冬の陣立てで、さまざまな記念事業を実施中です。当館も、このような事業の一環として、二つの展覧会を開催しました。



森忠政展開会式風景（10月9日）

### 春の陣「鍬形蕙斎」

平成16年3月20日(土)～4月18日(日)

鍬形蕙斎(1764～1824)は津山松平藩のお抱え絵師です。江戸に在住して、津山城御殿の襖絵などとともに、名所風景や庶民の生活描写などの浮世絵名品を多く残しました。ところが、洗練された軽妙な作風のためか、同時代に活躍した葛飾北斎などに比して、蕙斎の名はあまり世間に知られていません。

そこで、蕙斎を大いに津山市民に理解してもらうとともに、全国にも発信することをめざして、鍬形蕙斎展を催しました。

展覧会では東京・太田記念美術館の全面的な御協力を得て、同美術館、東京国立博物館などから数々の名品を出品していただきました。本格的な蕙斎展としては、初めての試みであるものの、浮世絵という専門的な内容だけに多少の不安もありましたが、ちょうど桜の季節とも重なって、連日大盛況でした。おかげさまで、昭和63年の開館以来、最高の特別展入館者数を記録することができました。

### 秋の陣「戦国武将森忠政 -津山城主への道-」

平成16年10月9日～11月14日

森忠政(1570～1634)は美濃の土豪から、織田信長・豊臣秀吉・徳川家康に仕え、戦国の世を生き残り、美作一國約19万石の大名となった名武将です。この展覧会では、忠政の出身地・岐阜県兼山町をはじめ、遠く長野市・名古屋市などから関連資料66点を借用し、忠政の生涯とその歴史的意義を解明することにつとめました。開会にあたっては、兼山町の渡辺町長・川合議長等をお迎えして盛大に開会式を挙行しました。

展示物の一つ、細川家九曜紋入洋鐘は、忠政が小倉藩主細川忠興から送られた南蛮鐘ですが、所蔵者の大阪・南蛮美術館の特別の御好意により、観覧者一人一人に実際に鐘

を鳴らしてもらうようにしました。このようなことで、開会直後は入館者の出足も好調でしたが、会期たけなわの10月20日、台風20号が列島に襲来し、津山も大きな被害を被りました。その影響でそれ以降入館者が激減し、やきもきさせられました。しかし、10月末から盛り返し、最終的には目標の入館者数を達成することができ、築城400年記念にふさわしい意義深い展覧会となったと思います。

両展覧会とも、各所蔵者をはじめ、いろいろと御尽力いただいた方々、それに御観覧いただいた大勢の皆様にご心より御礼申し上げます。

**博物館  
入館案内**

- 開館時間 午前9:00～午後5:00
- 休館日 毎週月曜日・祝日の翌日  
12月27日～1月4日・その他
- 入館料 一般 210円(160円)  
高校・大学生 150円(120円)  
中学生以下 無料  
※( )は30人以上の団体

博物館だより No.45 平成17年1月1日  
編集・発行/津山郷土博物館  
〒708-0022 岡山県津山市山下92  
TEL(0868)22-4567 FAX(0868)23-9874  
E-mail: tsu-haku@tvvt.ne.jp  
印刷/(有)弘文社